

第 16 回：心配り

教場長 田中仙融

昔は、茶道は花嫁修業の一つといわれていました。
なぜ、嫁ぐ前に茶道を学んでおくよかったのでしょうか。
それは、心配りができるようになるからだと思ひます。

今は、点前の所作を学んで、磨きをかけ、その技術を向上させるのが茶道を極めることと考えていらっしゃる方が多いようですが、私はそうは思ひません。

茶道を学ぶことで、まずは自分の役割ということをしかりと学びます。今日は末客としてみなさんの世話役としてお供をさせていただくのか、正客として連客の皆さまをリードして招いた方の気持ちにお答えするのか。また、亭主として席を運営する役を任されるのか。亭主の代りに点前座で客をもてなす役をさせていただく機会を得られたのか。

つねに自分は同じではなく、学んできた基本の中から今はその立場に合わせてどんな気働きをして行動をするべきなのかということに身に付けることができたのだと思ひます。

しかし、このようなことは決して先生の指導の中の言葉には表れるものではありません。

自身が稽古を通し、先輩の所作を見て、経験して、受け止めて、自分の中で育てていくものなのでしょう。

初釜の際に、前会長¹が点前をした茶を母が、凜としながらも前会長の点前のリズムを崩さず、そして、慎み深く給仕をしていた姿が思ひ浮かびます。

襖の後ろで前会長の点前のリズムを計りながら、静かに耳を立てていた姿から多く学ぶものがありました。

点前の所作だけではなく、心を配るということに今年の課題にしてみませんか。

平成 28 年 02 月発行 会報「えんじゅ 86 号」掲載

¹ 仙翁前会長のこと